

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04282

研究課題名(和文)聴覚障害ソーシャルワーカーの養成プログラムに関する研究

研究課題名(英文)The Research on the Training Program of Social Workers in Working with Deaf and Hard of Hearing People

研究代表者

原 順子(Hara, Junko)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：60309359

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文): 聴覚障害ソーシャルワーカーが修得すべき専門性について、聴者社会の中でのろう者・難聴者等の立ち位置を理解したソーシャルワーク実践を行う重要性を明らかにした。具体的には文化モデルアプローチ、多文化ソーシャルワーク、反抑圧的实践が、多様かつマイノリティである当事者を有効かつ公平・公正に支援できることを考察した。またろう文化やデフコミュニティの特性を理解した専門性が必要であることをインタビュー調査により明らかにした。具体的には狭いデフコミュニティ故に生じがちな個人情報漏洩防止策、少ない社会資源の効果的活用、多職種連携アプローチの活用、クライアントの手話言語レベルに応じた高い手話言語力などであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究目的は聴覚障害ソーシャルワークの専門性を担保したソーシャルワーカーを養成するためのプログラムを開発・検証することであったが、新型コロナウイルス感染拡大により、調査が予定通り実施できず大きな後れが生じた。そのためプログラムの開発・検証には至らなかったが、理論研究とインタビュー調査によりその専門性を具体化することができた。聴覚障害ソーシャルワークのみならず、障害者ソーシャルワークの理論研究にも貢献できる筈である。

研究成果の概要(英文): This study elucidated the importance of social work practice with an understanding of the position of Deaf and hard of hearing, and other related conditions from the perspective of the expertise required of social workers. Specifically, it discussed the manner the cultural model approach, multicultural social work, and anti-oppressive social work practice can effectively, fairly, and equitably support diverse and minority parties. The results of interviews also revealed the need for expertise that considers the characteristics of Deaf culture and Deaf community. Specifically, the study observed the need for measures to prevent the leakage of personal information, which tends to occur in small Deaf communities. Other needs included the effective use of scarce social resources, a multi-professional collaborative approach, and high levels of proficiency in sign language tailored to those of clients.

研究分野：社会福祉学

 キーワード：聴覚障害ソーシャルワーク 文化モデルアプローチ ろう文化 ろう者・難聴者等 養成プログラム
多文化ソーシャルワーク ろう者学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

聴覚障害者を対象とする相談体制については、手話ができる相談員の設置の希望が早期から叫ばれてきた歴史がある。そして聴覚障害者への生活上の諸問題に関する相談支援は、1963年北海道旭川市に相談員が設置されている。現在も全国に聴覚障害者を対象に相談支援をおこなう相談員が200人以上も配置されているが、相談員が多く存在するにもかかわらずその専門性は構築されていない。このような状況の中、研究代表者は、聴覚障害者をクライアントとする相談支援を「聴覚障害ソーシャルワーク」として位置づけ、その専門性に関する研究を継続しておこなっており、その研究成果は以下の3点に集約できる¹⁾²⁾。

1点目は、聴覚障害者を対象に相談支援活動をおこなっているソーシャルワーカー(=聴覚障害ソーシャルワーカー)へのインタビュー調査の質的研究により、聴覚障害者へのソーシャルワーク実践の枠組みを構築した。聴覚障害者は【多様性】をもつ【マイノリティ】であり、且つその障害の実態が【わかりにくい】障害である。また、聞こえる多数の人々で構成される聴者社会の中で、さまざまな生きづらさを抱えている聴覚障害者を対象とする聴覚障害ソーシャルワーカーの支援目標は、【聴者社会との関係性の改善】であり、そこには【聴覚障害に関する知識やコミュニケーション技術が必要】であり、その【独自の専門性】が求められるという実践の枠組みを構築した(原2015:60-82)。

2点目は、聴覚障害ソーシャルワーカーに必要な7つのコンピテンスを生成した。具体的には、多様な存在である聴覚障害者の理解 クライアントに応じたコミュニケーション・スキル 幅広い相談内容への対応力 制度に関する知識 社会資源の知識 IT機器活用術 アドボカシーである。この7つのコンピテンスの生成方法は、1点目の研究と同様に聴覚障害ソーシャルワーカーへのインタビュー調査を質的分析したものである(原2015:94-108)。

3点目は、文化モデルアプローチの理論的構築をおこなった。海外の文献では、聴覚障害者独自の文化として「ろう文化」についての記述が多くあり、聴覚障害者を対象とする専門領域では、2000年前後から「ろう文化」の独自性を重視した論文が多くなっている(Young1999, Glickman2003, Peters2007, Johnson2009, etc.)。例えば、言語文化モデル(a cultural-linguistic model of deafness)による介入の必要性(Young1999:159) ろう文化を理解することの重要性(Awareness of the Deaf Culture)(Peters2007:186) 積極的文化アプローチ(A Culturally Affirmative Approach)の提唱(Glickman2003:1-32)などのように、「ろう文化」を重視し理解することが、教育、カウンセリング、メンタルヘルス領域で指摘されてきている。この点に関してソーシャルワークの分野でも対人援助の専門領域として「ろう文化」を重視する文化モデルアプローチが、聴覚障害者をストレングス視点で介入する重要な理論であることを明確にした。例えば、聴覚障害者について聴者にネガティブな説明をおこなっている専門職に対して、文化モデルアプローチではポジティブな捉え方や説明に変換できることを検証した(原2016)。

以上のように専門性が求められる聴覚障害ソーシャルワークであるが、その専門性を担保したソーシャルワーカーの養成教育については、管見ではあるが明確な研究はわが国では見られない。社会福祉士、精神保健福祉士養成に関しても、聴覚障害者に関する内容は全く含まれていない。海外で出会う聴覚障害ソーシャルワーカー達からは、養成教育でAnti-Oppressive Social WorkやCritical Social Workを学修したという話をよく聞く。本研究では、対象者として障害者が含まれるこれらの理論を修得していない養成教育に警鐘を鳴らし、聴覚障害ソーシャルワーカーの養成プログラムを開発するのが本研究の研究目的である。なお、研究課題名を「養成カリキュラム」とせずに「養成プログラム」とした理由は、大学等の養成機関でのカリキュラムだけでなく、専門性を担保した聴覚障害ソーシャルワーカーの養成にかかわるプロジェクトを含めるためである。

<文献>

1)研究代表者:原 順子「聴覚障害ソーシャルワークの専門性構築に関する研究」平成 22~24年度

2)研究代表者:原 順子「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの研究」平成 25~28年度

Glickman, Neil (2003) Cultural Affirmative Mental Health Treatment for Deaf People: What it Looks Like and Why it is Essential, Mental Health Care of Deaf People - A Culturally Affirmative Approach, Lawrence Erlbaum Associates, 1-32.

Johnson, John R. & McIntosh, Angela S. (2009) Toward a Cultural Perspective and Understanding of the Disability and Deaf Experience in Special and Multicultural Education, Remedial and Special Education, Vol.30-2, pp67-83.

原 順子(2015)『聴覚障害者へのソーシャルワーク - 専門性の構築をめざして -』明石書店。

原 順子(2016)「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの一考察 - 具体事例から考察する文化モデル視点への転換 -」『四天王寺大学紀要』第62号、265-275。

Peters, W. Scott (2007) Cultural Awareness : Enhancing Counselor Understanding, Sensitivity, and Effectiveness :with Clients Who Are Deaf, Journal of Multicultural Counseling and Development, July 2007, Vol.35.

Young, A. M. (1999) Hearing parents' adjustment to a deaf child - the impact of a cultural-linguistic model of deafness, Journal of Social Work Practice, Vol.13, No.2

2. 研究の目的

本研究課題は、聴覚障害ソーシャルワークの専門性を担保したソーシャルワーカーを養成するためのプログラムを開発・検証することである。研究代表者は前述のように、聴覚障害者の特性やさまざまな実態の理解に必要な「ろう者学」の修得の重要性や、聴覚障害ソーシャルワーカーに必要なコンピテンスを抽出し専門性をこれまでに構築している。しかし、これらの専門性を修得するプログラム研究は未だなく、社会福祉士、精神保健福祉士といった国家資格のカリキュラムにも含まれていない。そこで海外における聴覚障害ソーシャルワーカーの養成に関する情報収集ならびに第一線で活躍している国内外の聴覚障害ソーシャルワーカーへの調査から、専門性を担保した聴覚障害ソーシャルワーカーの養成プログラムを開発し、またその検証をおこなう。

3. 研究の方法

- (1) 聴覚障害者への相談支援をおこなっている聴覚障害ソーシャルワーカーを対象に、養成プログラムについての調査をおこない、具体的なカリキュラムを開発する。
- (2) 海外での聴覚障害ソーシャルワーカーの養成においては、Anti-Oppressive Social Work、Cross-Cultural Social Work、Critical Social Work などのソーシャルワーク理論や、文化モデルアプローチが養成プログラムにどのように反映されているのかを明確にする。
- (3) ジェネラルなソーシャルワーカー（社会福祉士、精神保健福祉士）の養成プログラムに加えて、修得すべきカリキュラム内容を明確にする。
- (4) 本研究で開発した養成プログラムを研修会などで聴覚障害ソーシャルワーカーに受講してもらい、その効果を明確にし、養成プログラムの妥当性を検証する。本研究はプログラムの開発だけではなく、内容の評価を PDCA サイクルにて検証する。

4. 研究成果

研究当初は上記の4点（「3. 研究の方法」）について実施予定であったが、2020年から始まったCOVID-19の感染拡大により、理論研究はできたが、調査が大幅に遅延したために具体的なカリキュラム開発と検証ができなかった。そのため（1）理論研究（2）調査研究について説明する。

（1）理論研究

「障害者ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスと理論的枠組みの構築に関する試案
文化モデルアプローチとインペアメント文化論との融合をもとに」

（要旨）

聴覚障害者のろう文化とインペアメントのある身体が紡ぎ出した生活様式を総称したインペアメント文化に注目し、この2つの文化の関係性を基に、多文化ソーシャルワークの中での障害の位置づけとカルチュラル・コンピテンスから障害者ソーシャルワークへの理論的構築を研究目的とした。具体的には、聴覚障害ソーシャルワークにおける文化モデルアプローチからインペアメント文化を尊重したソーシャルワーク実践のカルチュラル・コンピテンスの試案を導出することで、これらの文化的視点が障害者ソーシャルワークにおいて重要な観点であることを理論的に考察した。

（キーワード）障害者ソーシャルワーク、ろう文化、インペアメント文化
カルチュラル・コンピテンス、文化モデルアプローチ

（研究の方法）

ろう文化の構成要素とろう文化の定義に鑑み、インペアメント文化との比較検討を文献レビューにより実施し、さらにろう文化とインペアメント文化の理論的比較を行うことで、両者の関係性について考察した。次いで、多文化ソーシャルワークでの障害の捉え方に基づき、ろう文化とインペアメント文化を反映させたカルチュラル・コンピテンスについて比較検討した。以上を踏まえ、筆者が以前提唱した「ろう文化を尊重したソーシャルワーク実践のカルチュラル・コンピテンス」にインペアメント文化を取り入れ、「インペアメント文化を尊重したソーシャルワーク実践のカルチュラル・コンピテンス」に関して理論的に考察した。

なお、研究倫理的配慮としては、「日本社会福祉学会研究倫理規程」を遵守し研究を行った。

（まとめ）

聴覚障害者のろう文化に基づく文化モデルアプローチ概念を、インペアメントを有する集団の文化にも援用することで、概念的には完全に合致しない点もあるが総じて障害者ソーシャル

ワークとして位置づける試みを行い、インペアメント文化もろう文化と同様に説明可能であることが確認できた。そして障害者を文化的視点で語るうえで多文化ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスにも言及し、障害者を多文化ソーシャルワークで捉えている諸説を紹介した。インペアメント文化概念を導入することで、聴覚障害ソーシャルワークの「障害者ソーシャルワーク」化が果たされ、「文化モデルアプローチ」は障害者領域におけるソーシャルワーク全般に適用できるものへと理論的に発展させることが可能となった。

「聴覚障害ソーシャルワークの文化モデルアプローチ修得に関する一試論」

(要旨)

福祉的支援を必要とする、聞こえない聞こえにくい人たち(=聴覚障害者)への相談支援をおこなう専門職(=聴覚障害ソーシャルワーカー)が修得しておくべき知識やスキルについて、その内容および相談支援の基盤となるソーシャルワーク理論を概観した。その結果、聴覚障害者を社会の主流から排除しないためにも、ろう文化を理解し、聞こえるものが主流である聴者社会の中での立ち位置を理解したソーシャルワーク実践を行うには、文化モデルアプローチ、Culturally responsive social work の学びが必須であり、さらには Anti-Oppressive Social Work Practice を修得することにより、多様性かつマイノリティである聴覚障害者を有効かつ公平・公正に支援できることを理論的に考察した。

(キーワード) 聴覚障害ソーシャルワーク、文化モデルアプローチ、自己覚知

Culturally responsive social work、Anti-Oppressive Social Work Practice

(研究の方法)

クライアントのろう文化を理解し、その文化を尊重したソーシャルワーク実践として、ろう文化に焦点をあてたソーシャルワーク理論(文化モデルアプローチ、Culturally responsive social work)について論じた。更にクライアントが受ける社会的抑圧や構造的要因を理解する実践である Anti-Oppressive Social Work Practice について概観し、聴覚障害ソーシャルワークにおいて有用であることを考察した。

倫理的配慮としては、本研究は文献研究であり、文献の引用等は研究倫理基準として「日本社会福祉学会研究倫理規程」に基づき行った。

(まとめ)

本論文の前半では自己覚知につながる障害認識について、後半はソーシャルワーク理論として文化モデルアプローチ、Culturally responsive social work、Anti-Oppressive Social Work Practice について概観したが、さらに各々の理論的考察を更に深化させ、聴覚障害ソーシャルワーク実践での活用が求められることを論述した。

聴覚障害者の障害者観が大きく変化してきた要因の一つにIT機器の発達がある。以前から世界ろう者会議などの国際会議では、手話を使ってスマホやiPadで遠隔通話をしている人たちがおり、世界中にいるデフコミュニティの存在を実感した。社会の変化とともに聴覚障害者だけでなく他の種別の障害者も変化してきている。その変化に気づくことにより、ソーシャルワーカーは自分の立ち位置についての省察を常にバージョンアップしていくことに敏感であらねばならないが、それを怠ると公正公平な社会正義の実現には程遠いものになってしまう。ソーシャルワーカーはこれを常に心掛ける必要がある。

(2) 調査研究

聴覚障害ソーシャルワーカーを対象としたインタビュー調査を予定していたが、COVID-19 感染拡大により実施がままならず、当初の予定より大幅に遅れてしまった。オンライン(Zoom)でのインタビュー調査も実施したが、研究協力者のWi-Fiの調子が悪く、通信が途絶えたりフリーズしてしまうこともあり、感染者数が少ない時期を見計らって対面実施を試みた。最終的に6名(オンラインも含む)に実施でき、エビデンスを得ることができた。研究協力者の取得資格としては、社会福祉士や精神保健福祉士といったソーシャルワーカーの資格に加え、手話通訳士を取得している人たちを対象とした。

聴覚障害ソーシャルワーカーの養成に関しては、手話学習とソーシャルワーク学習とではどちらから始めると良いかについては、「先にとにかく、ろうあ者のことを知る。私たちと考え方も背景も違う人がいるというのを、まず自分で納得した上で、どう関わっていけばいいのかを勉強したほうが入りやすいのかなと思う。」「社会福祉士を先に取得してしまうと、聴覚障害、視覚障害、肢体障害とかを一つの障害としてしか見なくなってしまうので、なかなか背景をつかむところまでは行きにくいのではないかな。ろう者の背景を理解するのはやはり時間がかかるので。」という回答が多かった。手話をマスターし、ろう者の背景を理解する、すなわちろう者学を理解するには時間がかかるということであった。

聴覚障害者へのより良い相談支援をおこなうには、ソーシャルワークの知識やスキルに加え、ろう文化やデフコミュニティの特性を理解し、クライアントの第一言語である手話については、

例えばホームサインや年齢や地域によっても違う手話能力も必要であり、クライアントの手話言語レベルに応じた高い手話言語力の修得が求められる。具体的な専門性としては狭いデフコミュニティ故に生じがちな個人情報漏洩防止策、少ない社会資源の効果的活用とともに多職種連携アプローチの活用などであった。

調査研究は今後も継続し、詳細な分析で得た研究成果を公表する予定にしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 原 順子	4. 巻 69
2. 論文標題 障害者ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスと理論的枠組みの構築に関する試案－文化モデルアプローチとインペアメント文化論との融合をもとに－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 四天王寺大学紀要	6. 最初と最後の頁 41 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原 順子	4. 巻 第17号
2. 論文標題 聴覚障害ソーシャルワークの文化モデルアプローチ修得に関する一試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 四天王寺大学大学院研究論集	6. 最初と最後の頁 3 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/read0058358/ 四天王寺大学教員情報 http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/docs/guide/department/2018_members/in/hara.pdf researchmap https://researchmap.jp/read0058358/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------